

在日中国人留学生の異文化適応：パーソナリティ特性からの影響

孫 怡*

The Effect of Personality on the Adaptation of Chinese Students in Japan

SUN Yi

Abstract

The study examined the personality characters (using the Temperament and Character Inventory), self-efficacy and adaptation (socio-cultural and psychological adaptation) of 182 Chinese students (aged 20-23 yrs) during their first year in Japan. The results showed that Harm Avoidance, Novelty Seeking, Persistence, Self Directedness and Cooperation had significant correlation to socio-cultural or psychological adaptation, especially Harm Avoidance and Self Directedness suggested strong prediction of adaptation. The mediation effect of Self-efficacy between the link of personality characters and adaptation variables was also supported by the results. Further, a path model of the relationship among personality, self-efficacy and adaptation was analyzed and all of the results and implication were discussed.

Key word: Personality, Adaptation, Self-efficacy, Chinese Students, Acculturation

問題と目的

近年、在日留学生の人数が増え続けるにつれて、多くの研究が在日留学生の異文化適応問題を取り上げている。異文化適応にかかわる様々な個人要素と環境要因が検討されている。個人面では、言語能力(安達, 2002)やソーシャル・スキル(田中, 1996; 湯, 2004)、留学目的(葛, 1999; 岡益・深田・周, 1996)、異文化理解(加賀美, 2002)、学習態度・意欲(吉, 1999)、アイデンティティ(大野, 2002; 趙, 2007)などの影響が考察されている。また環境面では、ソーシャル・サポート(宋・石川・神庭 他, 2006)やソーシャル・ネットワーク(田中, 1997)、対人関係(James, 2007)、文化距離(井上, 2007; 横林, 2001)、ホスト国側の受け入れ態度(井上, 1997; 鈴木, 1997)などの影響が論じられている。

しかし、移民や留学現象がもっと多い欧米における異文化適応に関する理論や研究を見ると、在日留学生の異文化適応問題をもっと深く探るべきであると考えられる。Berry (1992)の文化受容に関する研究のフレームワーク (Figure 1 と Table 1) を参照すると、これまでの在日留学生を対象とした異文化適応研究においては、いまだ検討されていない影響要因があると考えられる。例えば、文化受容の前に存在した影響要因 (FPA) の中に、重要な個人内要因の一つであるパーソナリティを適応の予測要因として検討された研究が少ない。樋口 (1997)の研究によって、達成志向性と調和志向性が在日適応感に影響を与えることが確認されているが、パーソナリティの特性次元は多いため、他の側面から異文化適応に対する影響力を検討する必要もあるだろう。パーソナリティの様々な次元から考察し、異文化適応に影響力が強い要因を見出すことによって、これから日本へ留学しよ

キーワード：パーソナリティ、適応、自己効力感、異文化、留学生

*平成19年度生 人間発達科学専攻

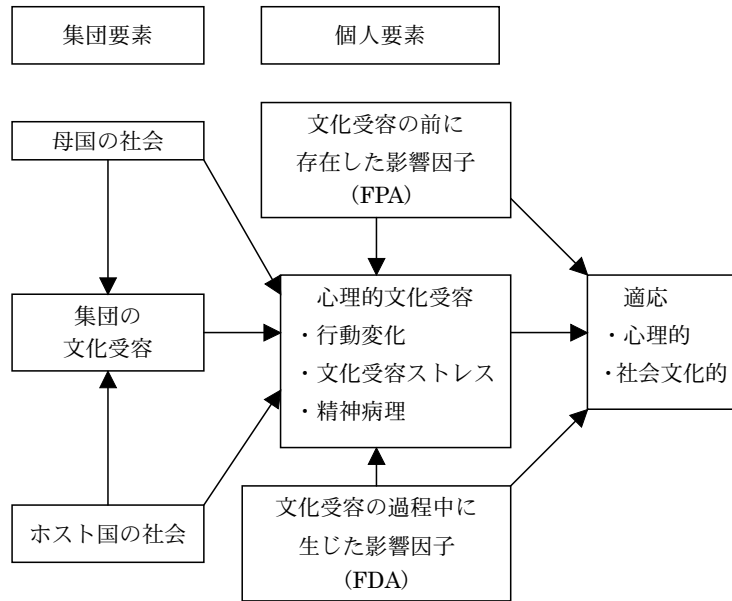


Figure 1 文化受容に関する研究のフレームワーク (Berry, 1992)

Table 1. 異文化受容と適応のプロセスを影響する具体的な要因 (抜粋)

要素	具体的な要因
文化受容の前に存在した影響要因	人口統計学 (e.g., 年齢, 性別, 学歴) 経済 (e.g., 地位) 個人属性 (e.g., 健康, 予備知識, パーソナリティ) 移住動機 (e.g., push vs. pull) 希望 (e.g., 過度的 vs. 現実的)
文化受容の過程中に生じた影響要因	文化受容戦略 (統合, 同化, 分離, 周辺化) ホスト文化への接触/関与 自文化の維持 ソーシャル・サポート (評価, 利用) コーピング戦略&資源 偏見&差別

うとする人たちに対しては重要な情報になると考えられる。また現在、日本に留学している人たちに対しては、適応力の判断や改善への手がかりになるのではないかと推測される。

現在、日本人の欧米社会での適応力に関しては、Matsumoto (1999) によって開発された国際適応力テストの中で、自尊心、自己受容や開放性、柔軟性（オープンネス要素：新しい経験や多様な価値観に興味を持つ）といったパーソナリティ特性が最も重要な心理要素の1つとして取り上げられている。日本社会自体の国際化の浸透につれて、外国人の在日適応力に影響を及ぼす重要なパーソナリティ特性は何であろうか。本研究は、まず在日留学生の6割以上を占める中国人留学生を対象として、在日留学生の適応にかかわるパーソナリティ要素を検討する。

また、在日留学生の異文化適応に関するプロセスやメカニズムについても、いまだ解明されていないところが多い。上述の先行研究の中でも、ほとんどの研究が説明変数 (e.g., 日本語能力、開放性と柔軟性) と目的変数 (e.g., 適応状態) の二者間での直接的な関係にとどまっている。さらに説明変数と目的変数の間に存在する媒介変数や調整変数を検討することが、異文化適応プロセスの解明に必要と考えられる。在日中国人留学生の適応に関する先行研究の中で、多要因間の因果関係に触れたものは少ないが、湯 (2004) は「日本語能力・過去のソーシャル・スキル・異文化理解・対人志向性→現在のソーシャル・スキル→対人ストレス→適応」との因果関係も

デルを検証した。Berry (1992) の文化受容に関する研究のフレームワークによって、ある程度安定したパーソナリティは文化受容の前に存在した影響因子 (FPA) として取り上げられている。本研究では、パーソナリティから文化受容の過程に生じた影響因子 (FDA) への影響を検討することで、パーソナリティと異文化適応との間に働いている媒介要因を探ることとした。

高齢者や慢性疾患患者を対象とした先行研究によって、自己効力感という認知要因が適応状況や精神状態に影響する要因であると明らかにされた。例えば、患者の自己効力感が chronic low back pain (CLBP) による抑うつを予測すること (Karoly, Okun, Ruehlman, & Pugliese, 2008)；高齢者の自己効力感がリソースの媒介要因になって、幸福感に影響を与えること (Jopp & Rott, 2006) が示唆された。さらに、一般的自己効力感がエージング適応の一つ因子として検討された (Moraitou, Kolovou, Papasozomenou, & Paschoula, 2006)。よって、留学生の異文化適応においても、自己効力感は適応に影響を与えるだろうと予測する。一方、パーソナリティ素因と自己効力感との関連も検証された。例えば、不安型成人愛着の高齢者がより自己効力感が低く、適応状態が悪いこと (Hadas, 2001) や、レジリエンス性の高い女性は自己効力感がより高く、流産に対してもより上手くコーピングできること (Major, B., Richards, C., Cooper, M. L., Cozzarelli, C. & Zubek, J., 1998) が示唆された。よって、留学生対象においても、パーソナリティ特性が自己効力感に影響を及ぼすだろう。そして、パーソナリティ特性が自己効力感を媒介して、異文化適応に影響するのではないか、本研究はさらにそのプロセスを検討する。

また、在日留学生の異文化適応に関する研究の中で、いままで社会文化的適応と心理的適応両方取り入れた研究は多いが、その2つの側面の関係を検討するものはまだ少ない。そのため、ここで、その異文化適応の2側面間の関連も考慮しながら、パーソナリティの適応に対する影響のメカニズムを検討する目的にした。

以上、本研究では、在日中国人留学生の異文化適応に影響するパーソナリティ特性を探ることと、そのメカニズムを検討することである。

方法

調査対象者

在日中国人留学生182名 (男子83名、女子99名；年齢範囲=20-23歳、 $M=21.57$ 、 $SD=0.76$) であった。異文化移行の過程で、来日の1年目が一番大変である (井上, 伊藤, 1997) ことを考慮した上で、今回の調査対象者は、在日期間が半年以上～1年以下の中国人留学生に限定した。今回の対象者は、全員日本語能力試験2級以上であった。

調査手続き

2008年中、東京都と金沢市にある4ヶ所の4年制共学大学の国際交流センターの先生を通じて、在籍している中国人留学生200名に調査票を送った。同意を得た上で、匿名での回答を依頼した。合計182名分を回収した (回収率91%)。

質問紙の構成

(パーソナリティ特性)：Temperament and Character Inventory (Cloningerら, 1993) のTCI-125中国語版から抽出した55項目の短縮版 (孫, 2009) (TCI-125中国語版を使い、150人の予備調査で得られたデータに対して、因子分析と信頼性分析を行い、7次元の各下位尺度において、信頼性と因子負荷量の高い項目を選んで作成したもの) を使用した (例：“他人がとっくに諦めた後でも辛抱強く続ける”)。回答は、“当てはまらない (1点)” から“当てはまる (4点)” の4件法で尋ねた。CloningerのTCI理論において、パーソナリティとは、「環境に対する独特な適応の仕方を決定する心理生理的なシステムをもつ個人内の動的な組織」と定義されている。TCIの7次元は、4つの気質 (新奇性追求NS、損害回避HA、報酬依存RD、固執P) と3つの性格 (自己志向SD、協調性C、自己超越ST) からなる。TCI理論によって、気質特性は情緒的プロセスを、性格特性は理性的認知プロセスを予測すると論じられている (Cloninger, 2008)。内的妥当性を示す α 係数は、それぞれNS=.66,

HA=.72, RD=.56, P=.63, SD=.75, ST=.81, C=.75であった。

〈自己効力感〉：多くの先行研究によって、自己効力感は適応の影響要因の一つであることが示されていることから (Oppedal & Roysamb, 2007; 早矢仕彩子, 1993)、本研究では、在日中国人留学生の異文化適応についても同様の影響を及ぼすのかについて検討するために、Schwarzerによる一般的 (性) 自己効力感尺度 (General Self-Efficacy Scale, GSES) の10項目の中国語版 (王ら, 2000) を使用した (例：“何かあっても、私はうまく対応することができる”)。“当てはまらない (点)” から“当てはまる (点)” の4件法で評定を求め、算出した合計得点が高いほど、一般性自己効力感が高いことを示す。α = .89。

〈社会文化的適応〉：学校、アルバイト、日常生活、日本社会の4つの領域について、18項目から成る在日中国人留学生向けの社会文化的適応尺度を作成した (例：“学校の宿題や課題をよくできる”)。“当てはまらない (1点)” から“当てはまる (4点)” の4件法で評定を求め、算出した合計得点が高いほど、社会文化的適応状況が良いことを示す。α 係数は.82であった。

〈心理的適応〉：Spielberger (1970) による状態・特性不安検査 (State-Trait Anxiety Inventory) の状態不安の中国語版 (20項目) を使用した (例：“この1週間の中に、緊張感がある”)。“ほとんど感じていない (1点)” から“よく感じている (4点)” の4件法で評定を求めた。20項目の得点を合計し、“不安” 得点とした。得点が高いほど、不安が強く適応状態が悪いことを示す。α 係数は.93であった。

結果

変数間の関連

本研究では、パーソナリティ特性と自己効力感と適応との関連を検討するため、まず各変数間の相関関係をSPSS (12.0) で分析した。

Table 2 は年齢、性別、在日の滞在期間を統制した上で、各変数間の偏相関係数を示している。その結果、TCIの5次元 (損害回避、新奇性追求、固執、自己志向性、協調性) が社会文化的適応と有意な相関があり (それぞれ、 $r = -.46$; $r = .24$; $r = .27$; $r = .34$; $r = .31$; すべて $p < .01$)、4次元 (損害回避、新奇性追求、自己志向性、協調性) が不安と有意な相関が見られた ($r = .33$, $p < .01$; $r = .21$, $p < .01$; $r = -.43$, $p < .01$; $r = -.18$, $p < .05$)。即ち、TCIの気質・性格特性が在日中国人留学生の異文化適応に強い関連があった。

自己効力感と有意に相関したパーソナリティ特性は、損害回避、新奇性追求、固執と自己志向性であった (それぞれ、 $r = .55$; $r = .20$; $r = .41$; $r = .35$; すべて $p < .01$)。自己効力感は社会文化的適応と不安、両方有意に相関した ($r = .21$; $r = -.19$; $p < .01$)。即ち、自己効力感はパーソナリティとも、社会文化的/心理的適応とも相関が見られた。自己効力感が高いほど、社会文化的適応がよく、不安が低いと示された。

社会文化的適応と不安の間にも、強い負の相関が見られた ($r = -.38$, $p < .01$)。つまり、社会文化的適応が良い

Table 2. パーソナリティと適応変数との偏相関係数 (N=182)

TCI次元	自己効力感	社会文化的適応	不安
損害回避HA	-.55 **	-.46 **	.33 **
新奇性追求NS	-.20 **	-.24 **	.21 *
報酬依存RD	-.09	.12	.03
固執P	.41 **	.27 **	-.05
自己志向性SD	.35 **	.34 **	-.43 **
自己超越性ST	.05	.09	.14
協調性C	.03	.31 **	-.18 *
自己効力感	--	.21 **	-.19 **
社会文化的適応		--	-.38 **

* $p < .05$, ** $p < .01$
年齢・性別・滞在期間を統制した

ほど、不安が低くなる、心理的適応状態もよいと示された。

次に、パーソナリティから適応に影響するプロセスについて検討した。

パーソナリティと自己効力感と異文化適応との関連モデル

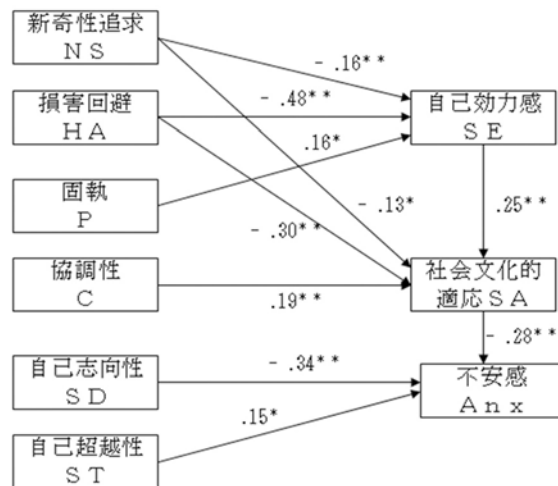
パーソナリティから異文化適応に影響するプロセスを検討するため、本研究の仮説と上述の変数間の相関関係に基づき、パーソナリティ特性と自己効力感と異文化適応との関連モデルをいくつか探索した（本研究のデータによっては、報酬依存RDの内的妥当性 α 係数=.56が低く、自己効力感、社会文化的適応、不安感との間にも有意な相関が見られなかったため、共分散分析に投入しなかった）。共分散分析Amos(4.0)で検討した結果、Figure 2のようなパーソナリティ・自己効力感・異文化適応のモデルの適合度指標が一番よかった（ $N=182$, $p=.17$, $\chi^2=18.78$, GFI=.98, CFI=.99, RMSEA=.04, AIC=80.78）。

得られたモデルによって、気質・性格特性はそれぞれ異なるルートで異文化適応に影響を与えていることが示された。パーソナリティと社会文化的適応との間における、自己効力感の媒介効果も検証された。

気質特性の中では、報酬依存以外の3次元（新奇性追求、損害回避、固執）、全部自己効力感を媒介しながら社会文化的適応に間接的な影響を及ぼした一方（NS/HA/P→SE→SA）、新奇性追求と損害回避は直接的にも社会文化的適応に影響を与えた（NS/HA→SA）ことが示唆された。中でも、損害回避から社会文化的適応への影響度が、間接効果（HA→SE→SA）と直接効果（HA→SA）を合わせて一番高い（ $\beta = -0.48 \times 0.25 - 0.30 = -0.42$ ）と示された。

性格特性の中では、3次元とも自己効力感に有意なパスが見られなかった。協調性が社会文化的適応に影響を与えたに対し（C→SA）、自己志向性と自己超越性は不安（心理的適応の尺度として）に影響を及ぼしたことがわかった（SD/ST→Anx）。

また、社会文化的適応から不安に有意なパス（SA→Anx）が見られた。従って、新奇性追求や損害回避、協調性が不安に直接的な影響はなかったが、社会文化的適応を介して、心理的適応に影響を及ぼした可能性はある。



* $p < .05$, ** $p < .01$

$p = .17$, $\chi^2 = 18.78$, GFI = .98, CFI = .99, RMSEA = .04, AIC = 80.78

注：数値は標準化されたパス係数を表している。また誤差変数eの図示は省略した。

Figure 2. パーソナリティ・自己効力感・異文化適応の関連モデル

考察

異文化適応に影響するパーソナリティ特性

本研究は、在日中国人留学生の異文化適応に影響するパーソナリティ特性を検討した。

まず、TCIのそれぞれの気質・性格特性と適応（社会文化的適応と心理的適応）との相関関係によって、異文化適応に影響を与える個人のパーソナリティ特性が示唆された。その結果、損害回避特性は社会文化的適応に高い負の相関、不安に高い正の相関が見られたことから、損害回避が高いほど、社会文化的適応と心理的適応の両方を低下させる可能性が考えられる。損害回避の高い個人は、心配症、緊張のしやすさ、内向的、ストレス・疲労を感じやすく、リスクを避ける行動傾向が見られる。そのため、未知なことや不確定なことが多い新しい環境においては、積極的にチャレンジすることが難しく、リスクやストレスを感じやすいと考えられ、社会生活の上でも心理的な面でも不適応になりやすいだろう。

新奇性追求は、異文化に有利な特性と予測したが、本研究の結果、社会文化的適応への影響については損害回避と同様の結果が得られた。つまり、新奇性追求が高すぎると、不適応になる可能性が高いことが示された。TCI理論において、新奇性追求の特徴としては、新しい物事やスリルを求める、意思決定が早い、攻撃的行動、短気、規則や法への意識が薄いなどの活動的行動性の強度を表すものである。中国社会よりも規則や秩序を重視する日本社会では、無秩序や衝動、浪費など行為は日本の社会文化に合わないと思われる。そのため、一つの解釈としては、このような特徴を持つ人は、学校や職場、社会生活において、仕事や人間関係がうまくいかず、ストレスや悩みが生じる可能性が高くなるだろう。また、スリルを求めること自体が、そうでない人よりも危険な出来事を招くリスクが高いことが考えられる。

自己志向性と協調性は、社会文化的適応と正の相関、不安と負の相関が見られ、異文化適応にポジティブな影響要因と考えられる。先行研究においても、例えば、樋口（1997）は、調和志向性が在日適応感に影響を及ぼすことを示している。また、自己志向性と協調性が在日留学生の精神的健康（General Health Questionnaire: GHQ）を予測していることから（孫, 1997）、自己志向性および協調性の高い人が社会文化上も心理的な面でもより適応しやすいと思われる。自己志向性とは、個人が選択した目的や価値観に従って、状況に合う行動を自ら統制したり、調節する能力のことである。自己志向性は、自らにとっての価値のある目的に向かい、葛藤状況においてもその状況の中で自らをコントロールする力が、精神的健康を損ねないための調節効果となる（松浦・菅原・酒井・眞榮・田中ら, 2008）。この自分をコントロールする能力は、自文化においても異文化においても適応への不可欠な能力であろう。また、協調性のある個人は、寛容で同情的で、協力的である。これは「和」を重視する日本社会の価値観と一致することから、このような特性を持つ人がより日本社会に馴染みやすいのではないと思われる。

固執は、社会文化的適応のみに正の相関が見られたことから、在日中国人の場合は、物事を長く続ける人、辛抱や忍耐度の強い人が日本の社会文化によりうまく適応できると言えよう。しかし、固執と心理的適応との間には有意な相関が見られなかった。固執の高い個人では、完全主義傾向もあるので（Cloninger, 1994）、よい心理状態になるとは限らない。

以上の結果から、異文化適応に影響を及ぼすパーソナリティ特性は、一般的な適応の影響要因の他にも、ホスト国の文化や価値観、留学先で求められるパーソナリティあるいは認められるパーソナリティにも左右されると考えられる。

関連モデルについての検討

本研究で検討された「パーソナリティ特性・自己効力感・異文化適応の関連モデル」によって、TCIの気質特性と性格特性がそれぞれどのように認知要素と絡みながら、異文化適応（社会文化的と心理的）に影響を与えているとのプロセスが示唆された。損害回避や新奇性追求といった気質特性が社会文化的適応を左右するに対し、自己志向性や自己超越性のような性格特性はより心理的適応に直接的な影響を及ぼすことがわかってきた。その中でも、損害回避から社会的適応へのネガティブな影響と、自己志向性から心理的適応へのポジティブな影響が特に強かった。さらに、社会文化的適応と不安との強い関連から、損害回避は自己効力感や社会文化的適応を

介して、間接的に精神状態にネガティブな影響を及ぼしたことも考えられる。それは孫（2006）が検証した、自己志向性は異文化下での精神健康と正の相関を、損害回避は負の相関を持つことを支持した。また、パーソナリティ特性と適応の間における、自己効力感の媒介効果も検証され、Majorらが（1998）疾患患者を対象とした先行研究の結果と一致した。

これら異文化適応に影響するパーソナリティ特性や認知要素は、今後、個人が海外へ留学する際に、重要な参考因子になるだろう。また、多要因・多ルートの影響プロセスがさらに明らかになれば、適応の促進または不適応の改善に役立つだろう。適応は、一つの要因で決められるものではないので、自分が持っているポジティブな特性を活かし、適応に不利なところに気をつければ、よりうまく異文化に適応していくのではないだろうか。

限界

本研究では、損害回避と自己志向性が異文化適応の強い影響要因であることを検証し、自己効力感の媒介効果も検討したが、他のパーソナリティ特性や、媒介要因、調整要因のメカニズムはまだ明らかにされなかった。今後は、他の変数を取り入れ、さらに詳しく検討していくことが求められよう。

また、本研究の結果から、社会文化的適応と心理的適応との関連について重要視する必要性が示唆されたが、今後はさらに抑うつなど、不安以外の尺度を心理的適応の指標として、様々な側面から両者の関連を検討していくことが求められよう。

さらに、今後縦断研究によって、これらの変数間の因果関係を検討することが望ましいだろう。

参考文献

- 安達一雄（2002）. 外国人留学生の日本語能力と異文化適応について 留学生教育, (7), 103~119.
- Berry, J. W., & Sam, D. L. (1997). Acculturation and adaptation. *Handbook of cross-cultural psychology*, Vol.3, 293-319. Allyn and Bacon.
- Bowling, N. A., Beehr, T. A., & Swader, W. M. (2005). Giving and receiving social support at work: The roles of personality and reciprocity. *Journal of Vocational Behavior*, Vol.67(3), 476-489.
- Caplan, G. (1974). *Social support and community mental health; Lectures on concept development*. New York; Behavioral Publications.
- Cassel, J. (1974). Psychological processes and "stress": Theoretical formulations. *International Journal of Health Service*, Vol.4, 471-482.
- Cloninger C.R. (2008). The Psychobiological Theory of Temperament and Character: Comment on Farmer and Goldberg (2008). *Psychological Assessment*, Vol.20(3), 292-299.
- Cukrowicz, K. C., Franzese, A. T., Thorp, S. R., Cheavens, J. S. & Lynch, T. R. (2008). Personality traits and perceived social support among depressed older adults. *Aging and Mental Health*, Vol.12(5), 662-669.
- 陳金・高田谷久美子（2008）. 在日中国人留学生の勉学・生活におけるソーシャルサポートの特徴とその効果 *Yamanashi Nursing Journal*, Vol.6 No.2, 17-24.
- 趙衛国（2007）. 中国人高校生の異文化適応過程—文化的アイデンティティ形成の要因に注目して 東京大学大学院教育学研究科紀要 47, 337~346.
- Cutrona, C., & Russell, D. (1990). Type of social support and specific stress: Toward a theory of optimal matching. In B. Sarason, I. Sarason, & G. Pierce (Eds.), *Social support: An interactional view*. New York: Wiley.
- Ennis N.E., Hobfoll S.E., Schröder K.E.E. 2000. Money Doesn't Talk, It Swears: How Economic Stress and Resistance Resources Impact Inner-City Women's Depressive Mood. *American Journal of Community Psychology*, Vol.28(2), 149-173(25).
- 吉洪（1999）. 中国人留学生のピリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応に与える影響 学生相談研究 20(2), 143~152.
- 早矢仕彩子（1993）. 外国人学生に見る自己意識と日本社会への適応：自己効力感・社会生活スキルを中心として名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科 40, 267-268.
- 樋口康彦（1997）「留学生のパーソナリティ特性が在日適応感に与える影響について：達成志向性・調和志向性の観点から」『実験社会心理学研究』37巻2号, 150-164.
- Hadas, A. (2001). Predictors of perceived self-efficacy among White and African American psychologically distressed older adults. *Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering*, Vol.62(2-B), 1079.

孫 在日中国人留学生の異文化適応：パーソナリティ特性からの影響

- 井上孝代・伊藤武彦 (1997). 留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康 心理学研究, 68, 298-304.
- 井上奈良彦 (2007). 日本の国費留学生の異文化的適応 —九州大学における複数の事例調査— Kyushu Communication Studies, Vol. 5, 61-74.
- James (2007). 異文化間適応における言語と対人関係の影響—来日外国人留学生の状況 南山大学国際教育センター紀要 8, 26~46.
- 葛文き (1999). 「留学生の異文化適応に関する研究 —来日目的, 対日イメージと適応度との関連を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要 (心理学)』46号287-297.
- 加賀美常美代 (2002). 異文化シミュレーション・ゲームから見た異文化理解 三重大学留学生センター紀要 (4), 75~86.
- 神谷順子 (1998). 留学生の異文化適応過程における言語習得とソーシャル・サポートの効果 日本教育心理学会総会発表論文集 (40), 82.
- 木島伸彦・斎藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 (1996). Cloningerの気質と性格の7次元モデルおよび日本語版Temperament and Character Inventory (TCI); 精神科診断学 7, 379-399.
- Karoly, P., Okun, M.A., Ruhlman, L.S. & Pugliese, J. A. (2008). The impact of goal cognition and pain severity on disability and depression in adults with chronic pain: An examination of direct effects and mediated effects via pain-induced fear. *Cognitive Therapy and Research*, Vol.32(3), 418-433.
- Kim, Y. Y. (1988). Communication and Cross-cultural Adaptation: An Integrative Theory. Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Kim, Y. Y. (2001). Becoming Intercultural: An Integrative Theory of Communication and Cross-cultural Adaptation. Thousand Oaks, CA: Sage
- Lassegard James (2007). 異文化間適応における言語と対人関係の影響—来日外国人留学生の状況. 南山大学国際教育センター紀要 Vol. 8 (2007) 26~46.
- Major, B., Richards, C., Cooper, M. L., Cozzarelli, C. & Zubek, J. (1998). Personal resilience, cognitive appraisals, and coping: An integrative model of adjustment to abortion. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.74(3), 735-752.
- Moraitou, D., Kolovou, C., Papisozomenou, C. & Paschoula, C. (2006). Hope and adaptation to old age: Their relationship with individual-demographic factors. *Social Indicators Research*, Vol.76(1), 71-93.
- Matsumoto, David (1999). 「日本人の国際適応力」三木敦雄 (訳) 本の友社 156-171.
- 松浦素子・菅原ますみ・酒井 厚・眞榮城和美・田中麻未・天羽幸子・詫摩武俊 (2008). 成人期女性のワーク・ファミリー・コンフリクトと精神的健康との関連—パーソナリティの調節効果の観点から パーソナリティ研究 第16巻 第2号, 149-158.
- 岡益巳・深田博巳・周玉慧 (1996) 「中国人私費留学生の留学目的及び適応」『岡山大学経済学会雑誌』27号 25-29.
- 大野千里 (2002). 在日留学生のアイデンティティと異文化適応の関係 日本青年心理学会大会発表論文集 (10), 32-33.
- Oppedal, B. & Roysamb, E. (2007). Young Muslim immigrants in Norway: An epidemiological study of their psychosocial adaptation and internalizing problems. *Applied Developmental Science*, Vol.11(3), 112-125.
- 宋愛芬・石川利江・神庭直子 他 (2006) 在日中国系留学生の異文化適応におけるストレスとソーシャルサポートに関する研究, 桜美林論集 (33), 109~117.
- 孫怡 (2009). 在日中国人留学生の異文化適応に関する検討—リソース理論によるアプローチ 日本パーソナリティ心理学会 第18回大会発表論文集 78-79.
- 鈴木一代 (1997). 「異文化遭遇の心理学—文化・社会の中の間人—」ブレイン出版株式会社 110-131.
- 田中共子 (1996). 異文化間ソーシャル・スキルによる異文化適応の介入研究の展開 広島大学留学生日本語教育 (8), 1-10.
- 田中共子 (1997). 「在日留学生の異文化適応: ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の観点から」教育心理学年報 37, 143~152.
- 湯玉梅 (2004). 在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究: 対人行動上の困難の観点から 国際文化研究紀要 10, 293-327.
- 植松晃子 (2004). 日本人留学生の異文化適応の様相: 滞在国の対人スキル, 民族意識, セルフコントロールに着目して 発達心理学研究 15(3), 313-323.
- 横林宙世 (2001). 地域・大学の規模による留学生と日本人学生の認知差—留学生の異文化適応要因の観点から 国際言語文化研究 (7), 109~122.
- 周玉慧・深田博己 (2002). 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究」社会心理学研究 第17巻第3号 150-184.